

はじめに

本書の主眼

『乙夜之書物』、一度その名を聞くとなかなか頭から離れない史料名だと感じるのは筆者だけだろうか。史料の中身をひもとくと、戦国時代の著名なエピソードに関する記述を数多く含んでいた。とりわけ、本能寺の変に関する情報は、確たる同時代史料が限られる中で、今後の研究に資する貴重な内容をもつ。本書では、その魅力の一端を読者諸賢と共有していきたい。

天正十年（一五八二）六月二日、明智光秀が主君織田信長を突然として本能寺に襲った。世に言う「本能寺の変」である。本能寺の変については、すでに膨大な著述があり、とりわけ光秀の動機をめぐる分析は枚挙にいとまがない。一方で、本能寺での戦いがどのようなに行われたのか、そこに至るまでに光秀はどのように動いたのか、そして変後の情勢などは、まだまだ考察の余地が残っていると思う。この点を意識的に取り組んだのが、鈴木貞哉・藤本正行氏の研究「鈴木・藤本二〇一四」である。彼らの問題意識や分析視角から筆者は多くのことを学んでおり、折に触れて言及することになるだろう。

さて、『乙夜之書物』という興味深い史料の記述を紹介することに主眼を置く本書は、右のような研究関心に基づき、本能寺の変（光秀の挙兵）だけでなく、山崎の戦いや坂本の落城（光秀方の滅亡）までを視野に入

れていく。小林正信氏は「軍勢の規模と政権の転覆を意図した事情から考えて、その実態が大規模な軍事的な反乱であったということは動かないことから、「乱」とする方が論理的に整合」すると説く「小林二〇一九」。また柴裕之氏は、光秀にとって本能寺の変とは、ただ主君の信長を討ち果たすだけではなく、現状の織田権力中枢を打破し、その拠点を掌握することを目的としたクーデターだったと捉えている「柴二〇二〇」。これらの提言には賛同したい。このように、本能寺襲撃だけのことさらに取り上げるのではなく、光秀の反乱全体をふまえた呼称こそ求められているのではなからうか。

天正三年七月三日、光秀は「惟任」の名字と、受領名「日向守」を与えられ、それまでの「明智十兵衛光秀」から「惟任日向守光秀」となる「信長公記」。ここに、信長が信頼する織田家宿老衆（御家老之御衆）の一人としての立場を明確にしていた。なお、信長からは当初「維任」の名字を授かったものの、「惟任」になったという「乃至二〇一九」。拙著では、維任名字を授与されて以降は明智ではなく、維任のち惟任を名乗った事実を重視し、挙兵から滅亡まで光秀方の一連の軍事行動を「惟任光秀の乱」と称したいが、いかがであろうか。

本書の構成

とはいえ、惟任光秀の乱に関する同時代史料の残存に制約があるのもまた事実で、『信長公記』や『惟任退治記』など比較的良質な二次史料が最も参照されるものとなっている。そのような状況を鑑みて、『本城惣右衛門覚書』のような後年の回顧談や聞き取りなどを、十分吟味した上で史料化しようとする昨今の研

究動向があり「白峰二〇二〇A・Bなど」、本書もそのような試みの一つに数えられよう。以下、拙著の構成を簡単に案内しておきたい。

第一章「『乙夜之書物』とその著者」では、本書のメインに据える『乙夜之書物』について、どのような史料なのか、著者はどのような人物なのかなど、基礎的情報を押さえる。記された内容を早く知りたいという方は読み飛ばしていただいても構わない。第二章以降は、史料写真・翻刻・大意を順に示した後、解説という形で私見を書き添えていく。

まず、第二章「『乙夜之書物』が記す織田信長攻め」では、光秀の拳兵から本能寺襲撃までを取り上げる。この間の情報量が最も豊富で、本書でも多くの紙幅を費やすことになるだろう。

次の第三章「『乙夜之書物』が記す織田信忠攻め」では、信長嫡男の信忠が立て籠もった二条御所攻めを主に取り扱う。

つづく第四章「『乙夜之書物』が記す乱の終焉」では、安土城占拠から山崎の戦い、坂本落城のほか、光秀家臣たちのその後もたどる。

また、第五章「『乙夜之書物』が記す戦国エピソード」では、光秀の乱に直面した前田利長の動向、信長の死を堺で知った徳川家康が断行した「神君伊賀越え」、佐々成政が厳寒期の北アルプスを踏破した「さらさら越え」、伊達政宗が死装束で豊臣秀吉との対面に臨んだと伝わる「小田原参陣」など、今日でも著名な逸話に関する『乙夜之書物』の記述を紹介していきたい。

結びの「おわりに」で、光秀の動機に関する私見を少しばかり述べた。なお、ところどころに本文と絡むコラムを組み込んだ。そのほか、付録として『乙夜之書物』の記述内容を一覧化した表を載せた。拙著で言及したエピソードは、全体からすればほんの一部にすぎない。関心のある方はぜひこの表をもとに、実際に本史料にあたっていたいただきたいと思う。また、本文の理解の一助とすべく、主な引用史料の解題もつけた。適宜ご参照いただきたい。

『乙夜之書物』は、光秀の乱をはじめとして戦国時代に関する様々な情報を含む、非常に興味深い史料だと思う。とはいえ、まだ研究は緒にいたばかりで、本書はそのスタートラインに位置付けられる。『乙夜之書物』を筆者が読んだ時に感じた魅力を読者諸賢に十分伝えられるか、はなはだ心もとないが、どうか最後までお付き合いいただきたい。

※本書は、公益財団法人高梨學術奨励基金 令和三年度若手研究助成「『乙夜之書物』の基礎的研究」の成果の一部である。

『異聞 本能寺の変―『乙夜之書物』が記す光秀の乱―』 目次

はじめに……………1

本書の主眼／本書の構成

第一章 『乙夜之書物』とその著者……………13

加賀藩内有数の知識人／政春の曾祖父・祖父・父母・姉妹

五二四条に及ぶエピソード集／息子たちに他見を禁じる

関屋家秘蔵の書はいつ流出したのか／書名の名づけ親と由来

『政春古兵談』との関係／小括―『乙夜之書物』の性格と伝来―

【コラム】『乙夜之書物』、何と読む……………36

第二章 『乙夜之書物』が記す織田信長攻め……………39

第一節 謀議と挙兵……………40

写真・翻刻 大意

解説

斎藤利三の到着を待つ／教寄屋での誓詞血判状／日暮れ前の亀山出發
桂川まで夜間の行軍／二〇〇〇余騎の先鋒隊／光秀は鳥羽に控えたり

【コラム】桂川で「敵は本能寺にあり」と言ったのか……………58

第二節 本能寺攻め……………60

写真・翻刻 大意

解説

明け方の乱れ髪／可児才藏吉長の参戦／最前線にいた斎藤利宗
利宗姪の子 井上重成

【コラム】白小袖の信長イメージはいつからか……………73

第三節 信長の最期……………76

写真・翻刻 大意

解説

畳を立て侍女を逃がす／何れも出よ、何れも出よ

第四節 謀反の遠因……………81

写真・翻刻 大意

解説 信州諏訪での折檻／小姓衆にも殴られた金柑頭／堀に膳を捨てさせられる
怨恨と不安の複合説

第三章 『乙夜之書物』が記す織田信忠攻め……………93

第一節 妙覚寺・二条御所へ……………94

写真・翻刻 大意

解説 急ぎ足で鳥羽を発つ／道中で出会った女房／京の町屋にいた信長家臣

【コラム】挙兵した光秀は何歳だったのか……………102

第二節 二条御所の攻防……………104

写真・翻刻 大意

解説

証言者は進士作左衛門か／門前に迫る光秀／負傷でその後を知らず

【コラム】山崎庄兵衛その後……………

115

第三節 脱出した織田有楽斎……………

118

写真・翻刻

大意

解説

狭間くぐりの悪名／信忠は自害した

第四章 『乙夜之書物』が記す乱の終焉……………

123

第一節 安土城の接収と山崎の戦い……………

124

写真・翻刻

大意

解説

安土城の財宝を分け与える／本陣「ランボウガ塚」／天王山の小競り合い

途方に暮れる大敗

【コラム】高野山に光秀供養墓を築かせた津田重久……………

137

第二節 明智左馬助と明智弥平次……………139

写真・翻刻 大意

解説 新座家老と越前衆／光秀「ライ」と光秀「御モツ立」

第三節 安土退去と坂本落城……………145

写真・翻刻 大意

解説 安土を捨て大津へ／波打ち際を駆け抜ける／不動国行の太刀／城に火を放つ

【コラム】明智左馬助の兄弟が築いた光秀墓……………156

第四節 信長に鎧を浴びせた天野源右衛門……………158

写真・翻刻 大意

解説 左の肩先を突く／顔に黒いアザ

第五章 『乙夜之書物』が記す戦国エピソード……………165

第一節 惟任光秀の乱直後の前田利長……………166

写真・翻刻 大意

解説 京都見物の上洛命令／日野から松ヶ島へ／安土は信雄が放火した

【コラム】前田利長の誕生日……………184

第二節 徳川家康の「神君伊賀越え」……………186

写真・翻刻 大意

解説 木津川で殺された穴山梅雪／本多忠勝の諫言／大和国経由伊賀越え説をめぐって

第三節 佐々成政の「さらさら越え」……………199

写真・翻刻 大意

解説 十八歳で供した者の証言／商人の道「ザラザラ越え」

第四節 伊達政宗の「小田原参陣」……………205

写真・翻刻 大意

第一章 『乙夜之書物』とその著者

加賀藩内有数の知識人

本書のメインとなる史料『乙夜之書物』は、加賀藩の兵学者であった関屋政春が寛文九年（二六六九）から十一年にかけて著した、三卷三冊にわたる自筆本だ。彼が見聞したおおよそ五百数十にも及ぶエピソードが、時に話の出どころも合わせて箇条書きされており、惟任光秀の乱などをはじめとして、戦国時代に關する興味深い情報を多く含む。史料ジャンルとしては「聞書」に属するだろう。聞書とは、他人の談話を聞き、これを書き留めたものをいう「桑田一九六九」。ただし、『乙夜之書物』には実体験や備忘的な記述も散見するなど、覚書の要素を併せ持つ。まずは、その著者である関屋政春がどのような人物なのか、可能な限りあぶり出す作業から始めよう。

一九四二年に編まれた加賀藩関係用語を扱う大事典『加能郷土辞彙』に基づく、政春は美濃国野村（現岐阜県大野町）領主の織田長孝の家臣であった関屋佐左衛門の子で、父の跡を継いでいたところ、寛永八年（二六三二）に主家が絶えたため浪人となり、同十年に金沢（現石川県金沢市）へ来訪、加賀前田家三代の前田利常（としね）に仕え、翌十一年には知行二〇〇石を賜り、馬廻組（うままわりぐみ）に列した。天明元年（一七八一）に編纂された『加陽諸士系譜』によれば、延宝元年（一六七三）に御使番（おつかいばん）となり、同五年に知行一五〇石の加増を受け、御先筒頭（おさきづつがしら）に任じられたという。一〇〇万石を越える領地を誇る加賀藩で、知行三五〇石取りはお世辞にも大身とはみせず、中級家臣の下位層といったところだろうか。天保三年（一八三二）編纂の『諸士系譜』によると、室には知行六三〇石取りの加賀藩士であった前田刑部（ぎょうぶ）（実名未詳）の娘を迎えている。婚姻時期は分からないものの、彼女との間に三人の男子が生まれた。そして、加賀藩士関屋家は、一八七一年の廃藩置県によつ



図1 山鹿素行像（赤穂市立歴史博物館蔵）

て藩士という身分が消滅するまで命脈を保ってゆく。

政春の生没年については、宝永二年（一七〇五）に編まれた『関屋氏諸系』によると、貞享二年（一六八五）十二月十四日に七十一歳で病死していることから、慶長二十年（一六一五）生まれと判断できる。豊臣家が滅び徳川の世が決定的となる大坂夏の陣が起きた年だ。加賀前田家でいえば、この前年に二代利長が没している。戦国を駆け抜けた者たちが次々と鬼籍に入る一方、列島社会が太平の世へと移り変わってゆく端境期に生を受けたこととなる。このように、政春が戦国時代をリアルタイムでは知らない世代である点には注意しておきたい。生年からみて『乙夜之書物』は、五十五歳から五十七歳という、当時としてはすでに

老年期に入った政春によって著されたわけである。

政春は鎧術に長けたほか、兵学者として名を馳せる人物で、山鹿流兵学の大成者である山鹿素行に学んだ。はじめ甲州流の兵法学者であったが、万治二年（一六五九）三月八日付で山鹿素行から兵法奥秘の口伝を伝授され、山鹿流の兵法学者となる「石岡一九八〇」。金沢で兵学を独学で学んだのではなく、やはり江戸で習ったのであった「深井一九九〇」。はじめ小幡景憲の晩年の門人である佐々木秀乗に師事して甲州流兵学の伝授を受け、利常に召し抱えられ、藩命により兵学の研究を行ったとされ、

藩主や家臣に対し兵学を講釈したという。そして政春の甥である有沢永貞ながさだ、その子である武貞たけさだと致貞ひらさだという弟子を得たことで、藩内に確固たる影響力をもった「近藤二〇一五」。当時の加賀藩内有数の知識人とみなしてよからう。

政春の曾祖父・祖父・父母・姉妹

ところで、関屋政春が加賀藩に仕えるようになるまでの同家は、どのような履歴をたどったのだろうか。延宝元年（一六七三）に政春本人がまとめた「政春自分之先祖等之覚書」〔『政春古兵談』や『関屋氏諸系』〕には、政春をはじめとして彼の曾祖父、祖父や父母・姉妹らの情報が簡潔ながら記されている。曾祖父の代より前の関屋家については定かでないものの、以下、主にこれらの史料に基づいて紹介しておこう。

政春の曾祖父にあたる関屋孫兵衛（実名未詳）は、徳川家康重臣の本多忠勝に仕えていた。時期は不明ながら、のちに出家して常信じょうしん（浄信とも）と名乗った。実子がいなかったため、矢田戸市郎（実名未詳）を養子に迎える。この人物が政春の祖父で、水野忠重（徳川家康の実の叔父）に仕えていた矢田忠左衛門（実名未詳）の二男だ。矢田家の本拠は西三河の高津波（現愛知県刈谷市）であった。ちなみに、戸市郎の妹は織田有楽斎うらくさい（信長の末弟、長益）の室であり、長男の織田河内守長孝を生む。かくして、戸市郎は関屋家の養子となったわけだが、幸か不幸か、実子の二代目孫兵衛（実名未詳）が生まれる。その二代目孫兵衛は、本多忠政（忠勝長男）のもとで大坂の陣に参戦して手柄を挙げた後、藤左衛門と名乗りを改めた。その子の二代目藤左衛門が、知行五〇〇石取りで引き続き本多家（四代の本多政勝）に仕えていたが、ついに政春と交流することは無

かったという。

政春祖父の矢田戸市郎は、孫兵衛の婿養子となって関屋を号したが、孫兵衛に実子（二代目孫兵衛）が生まれたため家を継がず、実父矢田忠左衛門と同じく水野忠重に仕え、天正十二年（一五八四）に起きた長久手の戦いにおいて二十四歳の若さで討死している。逆算して、生年は永禄四年（一五六二）となる。したがって、戦国時代をリアルタイムで経験したのは、むしろこの曾祖父や祖父の方といえる。

政春父の佐左衛門（実名未詳）は、遠江国岡田村（現静岡県磐田市）で生まれ、三歳の時に父戸市郎から離れ、継父の村串弥右衛門（実名未詳）に養育されていたところ、十歳ばかりで織田有楽斎のもとへ行き、長孝（有楽斎の長男、美濃野村織田家初代）の部屋住みとなり、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで功あって知行二〇〇石取りとなった。おそらく、父戸市郎の妹が有楽斎の室になっていた縁によるものだろう。織田長孝の従弟にあたる佐左衛門は、長孝・長次の二代に仕えて、元和七年（一六二二）七月六日に四十歳で病死しており、天正十年の生まれとなる。

政春の母は、加賀藩士であった中川八右衛門（実名未詳）の嫡女であり、二十九歳の時に夫の佐左衛門が病死したため、四人の子どもを養育し加賀国へ引越し、寛文三年（二六六三）二月十日に政春の屋敷にて七十一歳で亡くなった。加賀国へ移ったのは、父である加賀藩士中川家を頼ったものとも考えられ、当時まだ七歳だった政春も伴われたのだろう。政春にとって母方の祖父にあたる中川八右衛門は、『諸士系譜』によると、天正十七年に知行二〇〇〇俵取りで前田利家（加賀前田家初代）に召し抱えられたものの、のちに浪人となり、元和元年に知行八〇〇石取りで前田利常（加賀前田家三代）に再び召し出されている。

政春には、二人の姉と一人の妹がいた。長姉は有沢孫作（俊澄）の妻になっている。有沢孫作は知行三〇〇石取りの加賀藩士であった（『加陽諸士系譜』）。次姉ははじめ林孫右衛門（実名未詳）の妻になり、ほどなく夫と死別したのか、その後は不破権之介（実名未詳）に嫁いでいる。妹は馬測与三左衛門（実名未詳）の室となった。彼女らと政春は同母兄弟であり、政春母が養育した四人の子どもとは、この者たちを指すのである。ちなみに長姉は、政春から兵学を教わり加賀藩で有沢兵学を確立した有沢永貞を生んでいる。宝永二年（二七〇五）に加賀藩士の今枝直方（なむかた）がまとめた『当邦諸侍系図』（とうほうしよざむらいけいず）によれば、不破権之助（介）は「奥村源左衛門長重家来」、馬測与三左衛門は「竹田五郎左衛門与力」だという。『寛文元年侍帳』〔加賀藩初期の侍帳〕をみると、馬測与三左衛門は知行二〇〇石取り、竹田五郎左衛門は知行三六三〇石取りで人持組（ひともちぐみ）に属する上級藩士であった。奥村源左衛門も同じく人持組で、知行三二〇〇石取りの大身だ。つまるところ、政春の姉妹はいずれも加賀藩士（もしくはその家来や与力）に娶られた。

新兵衛を名乗った政春は、七歳の時に父佐左衛門が亡くなり、その知行二〇〇石を幼くして受け継ぎ、美濃野村織田家に仕えた。先述したとおり、父の死後しばらくは母や姉妹とともに加賀にいたと思しい。長孝嫡男の長次（長則、美濃野村織田家二代）が寛永八年（一六三一）に死去して同家が絶えた後、織田長政（有楽斎の四男、大和戒重織田家初代）の取り成しで、政春を含む織田長次旧臣九名が合わせて加賀前田家へ仕官したという。それが、寛永十年五月のことである。

近年、加賀前田家三代の利常が召し抱えた政春に対して出した知行宛行状（あてがひ）が発見された。すでに同家から離れて、福井県鯖江市在住の個人の方が、数十年前に購入して現存しているという「大河内二〇二七」。加賀

藩士関屋家の出発点となる貴重な史料であり、釈文を左に掲げておく。以下、引用する史料の句読点・傍注は、筆者による。

三ヶ国之内を以、弐百石之所々扶助訖、全可知行之状如件、

寛永十一

十二月廿七日利常(花押)

(政春)
関屋新兵衛殿

政春は、前田家の分国である加賀・能登・越中三ヶ国の中で二〇〇石の扶持を与えられた。文政十年(一八二七)に政春の子孫である関屋政良が『関屋氏諸系』を修正した『増補関屋氏系譜』は「同十一年、先知之通二百石拝領」と記している。これを裏付ける史料であり、禄高はかつて美濃野村織田家臣だった時代に準じたらしい。

この宛行状もそうだが、関屋家に伝来していた史料群の多くは、散逸してしまった。管見の限り、大河内勇介氏が近年に紹介した十数点のほか「大河内二〇一七」、貞享三年(一六八六)九月二日付の関屋市右衛門(政知)宛の前田綱紀(加賀前田家五代)知行宛行状、享保九年(一七二四)八月十一日付の関屋佐左衛門(政嗣)宛の前田吉徳(加賀前田家六代)知行宛行状、明和九年(一七七二)七月四日付の関屋松之助宛前田治脩(加賀前田家十一代)知行宛行状、以上の三通が二〇二〇年度に金沢市立玉川図書館近世史料館の所蔵に帰している

（請求記号 郷土資料〇九〇―一六九四―五・六・七）。詳しくは後述するが、関屋家で秘蔵されていた『乙夜之書物』については、明治時代初期に旧加賀藩主家に献上された。

五二四条に及ぶエピソード集

それでは、遅まきながら史料の概要をたどってゆこう。『乙夜之書物』上・中・下巻の全三冊は、金沢市立玉川図書館近世史料館の加越能文庫かえのうに収められ（請求記号 特一六・二八一―一〇）、石川県指定文化財となっている。各冊の表紙寸法は、おおよそ縦一四・五センチメートル、横一六・五センチメートルだ。『加能郷土辞彙』によると、豊臣・徳川二時代における加賀藩内外に関する事実を筆録したもので、上巻一五九条は寛文九年（一六六九）に、中巻一六九条も同年に、下巻一八一一条は寛文十一年に成ったという。

したがって、古くから『乙夜之書物』の存在は少なからず知られていた。そのため、必ずしも新発見史料ではない。早く一八九九年に上梓された永山近彰ちかあき編『加賀藩史稿』が、記述の典拠で引用している。また、前田家の動向や金沢城の出来事など加賀藩に関する記述の一部は、『加賀藩史料』や『金沢城編年史料』等で翻刻されてきた。また、ここ数年も幾人かの研究者が、『乙夜之書物』を史料として積極的に利用している。「大西二〇一六A・B、森二〇一七、大西二〇一八、柏木二〇二〇など」。ごく最近も、本能寺の変関連条文のいくつかを菅野俊輔かんの氏が読み下し、独自の解釈を加えている点「菅野二〇二二」を付言しておく。

まずは筆者なりに『乙夜之書物』の全体像を知るため、各巻に載る条文の冒頭を一覧化したのが『乙夜之書物』内容一覧（本書付録220〜250頁）だ。カウント方法による差異もあるが、上巻は一六五条、中巻は一六

七条、下巻は一九二条、計五二四条に及ぶ逸話が収められている。各条のあらまは、ひとまず書き出しから判断したくほかない。内容は極めて多岐にわたっており、強いて言えば関ヶ原合戦や大坂の陣に関する記述が目立つ。エピソードの時期としては、戦国時代から江戸時代のもののがほとんどだ。中には他者から聞いたのではなく、明暦の大火など自らが体験した事柄を実録的に記したもののほか、和歌や葉などのメモ書きのような条文も見える。

聞書という性格上、著者の関屋政春が誰から聞いた話なのか、またその話は又聞きなのかなどに注意するため、証言者が判明する限りにおいて表中に示した。木下順庵じゅんあんや沢田宗堅そうけんら加賀藩に仕えた儒者を含む加賀藩士たちが最も多く、美濃野村織田家時代の同僚家臣のほか、兵学の師である山鹿素行も散見する。一方で、「或人」や「古兵」とだけあつて具体的に誰かは分からないものや、そもそも取材源を全く記さない条文など、どこから得た情報なのか不明なエピソードが少なくないのも事実だ。

参考までに、すでに他書で翻刻されている条文については、その旨を翻刻・その他欄に記した。これらのほか、本書でも取り上げないもので読者諸賢が興味を持たれた条文については、ぜひ史料原本にあたっていただきたいと思う。

息子たちに他見を禁じる

次に、各巻の奥書をそれぞれ確認しておこう。積文は原文改行で示す。

索引

凡例

- 一、本索引は、人名、史料名、事項からなる。
 一、配列は50音順とした。

人名

【あ】

青地礼幹 107, 109, 176
 赤座永兼 105-107, 113, 114, 117
 明智左馬助 31, 41, 43, 46, 49, 124, 126,
 129, 139-154, 156, 157, 180, 181
 明智次右衛門（治右衛門） 46, 54, 153
 明智自然 147, 180, 181
 明智孫十郎 54
 明智光秀 → 惟任光秀
 明智弥平次（秀満） 42, 44, 49, 54, 60,
 62, 63, 100, 129, 139-144, 147, 148,
 150, 153, 154, 180, 181
 朝倉義景 117
 浅野長吉 163
 足利義昭 137
 芦峠村五左衛門 204
 芦峠村十三郎 204
 阿閉貞征 154, 214
 穴山梅雪 97, 177, 186-188, 190-192
 姉崎勘右衛門 168, 169, 173, 174
 天野源右衛門 158-164
 荒木山城 144
 有沢武貞 16, 26, 31-34
 有沢俊澄（孫作） 18
 有沢永貞 16, 18, 26, 32

有沢致貞 16, 26

【い】

池田恒興 40, 43, 45, 134, 135
 石谷頼辰 88
 石川数正 193
 伊勢貞興 133
 一色義時 109
 伊藤坦庵 99
 稲葉一鉄 70, 81, 83, 86-88, 90, 91
 井上清左衛門（重成） 44, 48, 61, 63,
 67, 70-72, 87, 88, 91, 145, 146
 井上土佐守 72
 井上兵左衛門 71, 72
 今枝直方 18, 70
 今枝直恒 209

【う】

上杉景勝 201, 202
 宇喜多秀家 71, 72
 歌川芳富 75
 宇野主水 55

【え】

永（玉泉院） 177-179
 江村専斎 99, 100

索引

江守是屑 159, 160, 163
江守祐庵 160
遠藤秀繕 180

【お】

正親町天皇 101
大久保忠教 80, 121, 194
太田牛一 46, 73
小川長保 180, 181
奥村次右衛門 167, 169, 172-174, 179
奥村長重 18
小倉秀貫 27
小倉松寿 100
小沢六郎三郎 100
小瀬甫庵 49, 73, 86, 102, 108, 128, 131, 132, 135, 149, 204
織田有楽斎（長益） 16-18, 26, 118-122
織田長孝 14, 16-18, 26
織田長次 17, 18, 26, 121, 122
織田長政 18, 121
織田信雄（尾張内大臣） 170, 171, 175, 176, 180-183, 201, 204, 215
織田信澄 40, 43
織田信孝 40, 43, 45, 48, 56, 57, 66, 130, 131, 134, 182, 215
織田信忠 3, 48, 56, 64, 94-101, 106, 107, 109-114, 117-122, 126-128, 155, 183, 192, 214, 215
織田信長 1-3, 16, 31, 40, 43, 45-50, 52, 54-60, 62-69, 73-91, 95-98, 100-102, 110-114, 117-121, 124, 126-128, 131, 137, 138, 147, 151, 152, 156, 158-162, 164, 166, 168-170, 172-175, 177-180, 182-184, 186-191, 214-216
織田信秀 119
越智玄蕃允 196
落合芳幾 162
小幡景範 15

【か】

開田太郎八 104, 106, 113
柿屋喜左衛門 85
勧修寺晴豊 114
梶原景久 101
梶原又右衛門 101
梶原松千代 101
春日局 68, 71
勝新太郎 208
加藤清正 70, 158, 159, 163
角屋七郎次郎 195
可児才藏（吉長） 61, 63, 65-67
鎌田新介 113, 122
蒲生氏郷 163, 170, 171, 175, 176, 180-183
蒲生賢秀 56, 127, 179, 180
神沢杜口 74, 161
ガンマク 166, 172, 178, 179

【き】

虚堂智愚 153
木下順庵 21
木村宇右衛門 212
木村高敦 177
木村昌明 102, 154

【く】

国枝清軒 89
国行 151
熊沢淡庵 74

【こ】

豪（樹正院） 71
高源院 209
河内山昌実 184
近衛前久 141
小早川隆景 212

小日向文世 208
 惟住長秀 40, 43, 56, 102, 130
 惟任光秀 1-4, 31, 40-59, 62-67, 69-71,
 73, 75, 78, 81-91, 94-104, 106-113,
 115-117, 119, 124-149, 151-160, 163,
 164, 170, 173-182, 184, 188, 192,
 214-217
 近藤喜三郎 199, 200, 202

【さ】

さい 78
 斎藤甚平 68-71, 135, 136
 斎藤龍興 66
 斎藤道三 101
 斎藤利治 101
 斎藤利三（内蔵助） 31, 41, 44, 46, 47,
 49, 53, 54, 60-62, 64, 67-72, 78, 81-
 84, 86-88, 90, 91, 100, 125, 126,
 134-136, 139-142, 146, 213, 214, 216
 斎藤利宗（佐渡守） 44, 50, 59, 61, 67-
 72, 87, 100, 110, 135, 136, 143, 145,
 146, 149, 182, 213, 214, 217
 斎藤虎松 69, 71
 斎藤三存 67, 71
 斎藤義龍 87
 酒井忠次 193
 佐久間信盛 86
 佐久間盛政 115, 116
 佐々成政 3, 199-204
 佐々木秀乗 15
 笹野高史 208
 里村紹巴 111
 誠仁親王 101, 110, 111, 113, 128
 沢田宗堅 21

【し】

四王天政実 163
 司馬遼太郎 75

柴田勝家 66, 71, 102, 115-117
 柴田勝定 71, 72, 214
 柴田勝政（三左衛門） 115, 116
 柴田勝全 71
 寿院 71, 72
 進士牛之助 108, 109
 進士作左衛門 101, 104-110, 113, 125,
 127, 135, 139-143, 213, 217
 進士作左衛門（二代） 107-109, 125, 127
 進士彦兵衛 109
 進士藤延 108
 進士美作守 109

【せ】

関屋市右衛門（政知） 19, 22-26, 32, 34
 関屋小三次（政晟） 22-26
 関屋佐左衛門 14, 17, 18, 26
 関屋十三郎（政良） 22-26, 34
 関屋戸市郎 16, 17, 26
 関屋藤左衛門（二代） 16, 26
 関屋孫兵衛（二代、初代藤左衛門） 16,
 17, 26
 関屋孫兵衛（常信、浄信） 16, 17, 26
 関屋政嗣（佐左衛門） 19, 26, 32, 33
 関屋政春（新兵衛） 14-19, 21-27, 29-
 34, 36, 44, 48, 63, 67, 70, 72, 80,
 87, 91, 101, 103, 107-109, 121, 122,
 127, 143, 146, 160, 163, 176, 189,
 190, 202, 208-211, 217
 関屋政良 19

【た】

高橋幸治 75
 高橋英樹 75
 高畠定延 184
 高山右近 134, 135, 147, 153
 高山次右衛門 → 明智次右衛門
 竹田五郎左衛門 18

索引

竹中重門 114, 149
竹村正義 195
竹村道清 195, 196
立花宗茂 163
伊達政宗 3, 27, 205-212
多羅尾光俊 193
多羅尾光雅 193

【ち】

長宗我部元親 47

【つ】

月岡芳年 74, 75
津田重久 128, 137-141
津田宗及 47
筒井順慶 40, 43, 45, 48, 196
恒川監物（久次） 80, 167, 169, 172-174,
176-179, 183
恒川斎而（斎仁） 76, 77, 80, 170, 172,
175-177
恒川登寿 185

【て】

寺沢広高 163

【と】

藤四郎吉光 153
徳川家宣 137
徳川家光 68, 70, 152
徳川家康（源君） 3, 16, 48, 82, 84, 85,
88, 89, 91, 97, 102, 121, 152, 177,
186-198, 201, 204, 211
徳川綱吉 137
徳川秀忠 152
徳川吉通 137
徳川吉宗 152
徳富蘇峰 48
外嶋加賀守 196

富田景周 184
豊臣秀吉 → 羽柴秀吉
豊臣秀次 66, 137

【な】

長岡忠興 40, 43, 45
長岡藤孝 48
中川清秀 133, 134, 147
中川八右衛門 17, 26
永沼喜八 161
長光 137
中村 168, 173
那波直治 216
南部氏 32

【に】

日通 103
日典 112, 155
丹羽長秀 → 惟住長秀

【の】

野崎雅明 156
野村伝兵衛 115, 116

【は】

羽柴秀勝 163
羽柴秀長 163
羽柴秀吉 3, 40, 42-45, 47, 58, 63, 74,
97, 115, 116, 124, 126, 129-131, 133,
134, 136, 137, 145-147, 151-153, 171,
176, 184, 201, 205-208, 210-212,
215
長谷川朝晴 208
蜂屋頼隆 56
服部貞信 194
林鶯峰 58, 86
林佐渡守 121
林甚介 118, 119, 121, 122

林孫右衛門 18
林羅山 58

【ひ】

土方次郎兵衛 101
平子種吉 68

【ふ】

福島正則 66
藤田伝五 46
古川九兵衛 161
不破権之介 18

【ほ】

細川忠興 → 長岡忠興
細川忠利 108
細川藤孝 → 長岡藤孝
堀太郎助 104-107, 113
堀麦水 156
堀秀政 40, 43, 45, 72, 89, 135, 145-147,
153
堀尾吉晴 132, 133, 135
本城惣右衛門 54, 69
本多忠勝 16, 187, 189, 192, 193
本多忠政 16
本多政勝 16

【ま】

前田刑部 14, 25, 26
前田綱紀 19, 28-30
前田利家 17, 66, 71, 80, 142, 160, 170,
175-178, 201, 202, 204, 209
前田利貞 209
前田利嗣 28
前田利常 14, 15, 17-19, 71, 72, 121, 206-
211
前田利長 3, 15, 80, 109, 137, 158-160,
163, 166-181, 183-185

前田直玄 206, 208-210
前田治脩 19
前田吉徳 19
前田慶寧 27, 28, 34
松田政近 (太郎左衛門) 124-126, 133,
134

松田龍平 208
松平家忠 194
松平定明 102
松永久秀 151
馬測与三左衛門 18

【み】

三澤昌兵衛 46
水野忠重 (惣兵衛) 16, 17, 121, 187,
189, 192
溝尾勝兵衛 46
三井加兵衛 160
箕浦大蔵 161
御牧景重 133
三宅弥平次 144
三輪作蔵 169, 174

【む】

村井貞勝 77, 99, 105, 106, 110, 112-114
村井長明 204
村串弥右衛門 17

【も】

毛利輝元 40, 43, 45
森秀利 73
森乱丸 162, 163
森本左馬助 196

【や】

安田国継 → 天野源右衛門
矢田惣助 26
矢田太兵衛 26

索引

矢田忠左衛門 16, 17, 26
矢田戸市郎 → 関屋戸市郎
山内一豊 121
山内康豊 121
山岡景以 147
山岡景隆 147
山鹿素行 15, 21, 67, 90, 91, 108, 188-
190, 192
山口小弁 105-107, 113, 114
山口長政 193
山口光広 193
山崎庄兵衛（長徳、閑斎） 104-107,
113, 115-117, 139-142, 213
山崎八之丞 25, 26
山崎八郎右衛門 26
山崎彦右衛門 104, 106, 113, 139, 140,
142
山森伊織 169, 174

【ゆ】

湯浅常山 74, 150

湯浅直宗（甚助） 68, 100

【よ】

楊斎延一 75, 162
吉川英治 75
吉田数馬 168-170, 173-175
吉田兼見 128, 129, 181, 183

【ら】

頼山陽 59

【る】

ルイス・フロイス 53, 85, 182, 184

【わ】

和田織部 197, 198
和田定教 194
和田助大夫 196
渡辺謙 208

史料名

【あ】

明智軍記 58, 102
 明智光秀像 45
 明智物語 73, 149, 160, 161
 穴山梅雪像 190
 有沢武貞年譜 32
 安養寺文書 147, 181, 183

【い】

家忠日記 121, 152, 191, 192, 194
 石谷家文書 67, 70
 石川忠総留書 191, 193
 一五八二年日本年報 補遺 信長の死に
 ついて 46, 50, 52, 53, 56, 65, 80,
 85, 110, 112, 113, 128, 131, 134, 147,
 153, 161, 182, 191
 乙夜之書物 1, 3, 4, 14, 15, 20, 22, 24-
 37, 45, 47, 49-51, 53-55, 57, 59, 63-
 65, 67, 71-73, 78, 79, 84, 86-91, 96,
 98, 100, 101, 103, 107-109, 111, 113-
 115, 117, 120-122, 128, 129, 131, 133-
 135, 138, 140, 143, 144, 149, 151,
 160, 162-164, 176-179, 181-183, 190,
 192-195, 202-204, 208, 210-215,
 217

【う】

上杉本洛中洛外図屏風 111
 宇土家譜（忠興公譜） 78, 89
 宇野主水日記 55, 56, 131

【え】

越中富山御城下絵図 157

越中国高岡山瑞龍閣記 184
 越藩諸士元祖由来書 163
 絵本太閤記 58, 73, 74, 85, 149, 150,
 162, 163, 201

【お】

大阪城天守閣所蔵文書 154
 織田有楽斎像 120
 織田信雄像 182
 織田信長像 78
 岡山藩家中諸士家譜五音寄 101
 翁草 74, 161, 163
 織田信長譜 56, 58
 御続書帳 37
 大音氏家系 37

【か】

戒和上昔今禄 133
 可観小説 107, 109, 176
 金井文書 45, 147
 兼見卿記 55, 57, 63, 65, 96, 101, 111,
 112, 114, 127-131, 134-136, 141, 151,
 153, 155, 179-181
 加陽諸士系譜 14, 18, 25, 70-72, 109,
 121, 209
 加陽人持先祖 117, 142, 160, 209
 川角太閤記 49, 51, 53, 86, 88, 115, 132,
 149, 150, 153
 寛永諸家系図伝 67-70, 72, 100, 133-
 135, 146, 162, 177, 180, 181, 192,
 193, 196, 197
 菅君雑録 184
 寛政重修諸家譜 67, 121
 関白任官記 184

索引

寛文元年侍帳 18

【き】

義残後覚 56, 87, 120

木村宇右衛門覚書 212

京都四条夜討之図 74, 75

記録御用所本古文書 195

【く】

首数之覚 138

【け】

慶長之侍帳 108

気多神社文書 184

【こ】

肯構泉達録 156

五ヶ山大牧入湯道之記 157

古組帳拔萃 108, 121, 202, 209

小島文書 48

惟任退治記 2, 49, 51, 53, 54, 63, 64,
98, 99, 111, 112, 128, 131, 142, 147,
149, 151, 153, 181

【さ】

佐々成政像 201

誠仁親王像 110

三守御譜 185

三州奇談 156

【し】

治家記録 212

松雲公採集遺編類纂 28

勝興寺文書 177

常山紀談 74, 150

諸土系譜 14, 17, 70, 71, 80, 160

諸土由緒帳 209

壬子集録 184

信長記 49, 73, 86, 102

信長公記 2, 45, 46, 49, 51, 56, 65, 68,
73, 77-80, 84, 90, 96, 99, 100, 112-
114, 122, 127, 143, 144, 148, 151, 161,
179, 195

【せ】

関屋氏諸系 15, 16, 19, 25

関屋政春覚書 27, 30, 34, 208, 211

先祖由緒并一類附帳 70, 71, 80

【そ】

桑華字苑 29, 30, 178

宗及茶湯日記 144

増補関屋氏系譜 19, 25

続武家閑談 177

祖父物語 85, 86, 88, 131

【た】

太閤記 108, 128, 131-133, 135, 143, 149,
204

大徳寺文書 151, 152

大日本史料稿本 27, 30, 34, 208

太平記英勇伝 64, 66, 68, 89, 143, 161,
162

高木文書 136, 153

立花朝鮮記 163

伊達家文書 177

伊達政宗像 209

多聞院日記 90, 114, 127, 136

【つ】

月百姿 141

津田氏先祖由来 137

【て】

天寧寺文書 144

伝前田利長像 178

【と】

当代記 49, 56, 65, 102, 120, 121, 191
 当邦諸侍系図 18, 70, 72, 178
 言経卿記 50, 55, 63, 65, 96, 99, 111,
 134, 136, 154
 徳川家康像 189
 徳川実紀 152
 利家公御代之覚書 142, 204
 戸田本三河記 193
 豊鑑 114, 149
 豊臣記 154
 豊臣秀吉像 210

【な・に】

中村不能斎採集文書 152
 日葡辞書 31
 日本外史 59
 日本史 52, 53, 69, 85, 101, 182

【は】

晴豊公記 50, 55, 57, 114, 128-130, 134,
 136

【ふ】

武家事紀 90, 108
 武家聞伝記 102, 154
 武将感状記 74
 武徳編年集成 191
 武辺咄聞書 89

【ほ】

細川家記 142
 盆応寺夜討図 75
 本城惣右衛門覚書 2, 51, 54, 64, 66, 68,
 73, 79, 144
 本誓寺文書 178
 本多忠勝像 192

本朝通鑑統編 86, 89, 191
 本能寺焼討之図 75, 162
 本藩歴譜 瑞龍公記 177, 178, 185

【ま-め】

前田創業記 184
 前田齐泰・慶寧・利嗣三卿連座像 28
 政春古兵談 16, 31-34, 49, 87, 103, 121,
 154, 214
 政春自筆之覚書 32, 33
 政宗記 212
 万治年間富山旧市街図 156
 三河物語 80, 121, 194
 妙覚寺所蔵文書 112, 155
 妙法堂過去帳 103
 村井貞勝像模写 112
 明暦大火焼失柳営御道具・刀剣目録
 152
 綿考輯録 108

【や】

山岡景以舎系図 147
 山鹿語類 66, 67
 山鹿素行像 15
 山鹿流の秘書 213, 214
 山崎庄兵衛家文書 117
 山崎長徳像 115

【よ】

雍州府志 192
 吉田右衛門覚書 184

【れ】

蓮成院記録 52, 55, 111, 112, 130, 133

【ろ】

老人雑話 99

事項

【あ】

上路越え 201
 安土城（安土） 3, 45, 82, 84, 88-90,
 107, 120, 126-129, 131, 136, 137,
 146, 147, 150, 151, 155, 170, 174, 178,
 180-182, 214, 216
 安土城留守居 179
 安土山 147, 181
 安房峠 202
 荒子城 185
 有沢兵学 18

【い】

飯盛八幡 193
 飯盛山 193, 194, 198
 伊賀越え 3, 190-192, 194, 195, 197, 198
 恵解山古墳 132
 乙夜之覧 30
 芋ヶ峠 197

【う】

浮世絵師 201
 浮世絵版画 75, 150, 162

【え】

越前一向一揆攻め 156
 越前衆 139, 142

【お】

老ノ坂峠 55, 58, 130
 大枝山（大井山） 42, 43, 51, 55, 58
 大坂夏の陣 15
 大坂の陣 16, 21

大坂本願寺 55
 大山崎神人 133
 小田原参陣 3, 27, 212
 小田原北条攻め 160, 207, 208
 落人狩り 96, 100, 112
 御土居 100
 御斎越え 190
 御斎峠 190, 191
 御物立 139, 143
 御坊塚 124, 126, 131, 135

【か】

加越能文庫 20, 32, 34, 37
 加賀藩 14, 16, 18, 20, 21, 27, 31-33,
 70, 107-109, 117, 143, 160, 162, 184,
 185, 204, 209
 —医 102
 —士 14, 17, 18, 21, 26, 31, 34, 44,
 70, 80, 107, 108, 113, 117, 131, 146,
 160, 184, 185, 202, 203, 209, 210
 旧—主家 20, 27, 28, 30, 34, 36
 旧—領 28, 203
 桂川 42, 43, 51-53, 55, 58, 59
 加太（加太越え） 190, 191, 194, 198
 金沢城 20, 27
 歌舞伎狂言 150
 龜山城 43, 44, 46, 47, 49, 50, 130, 136,
 144, 214
 唐櫃越え 51, 52
 家録方 27
 関白任官 215

【き】

岐阜城 151

清須会議 215
金柑頭 84, 87

【く】

国盗り物語 75
黒井城 44, 47

【け】

血判 42, 43, 49

【こ】

甲賀越え 190, 195
合寺令 157
講談 150
興福寺 55, 90, 133
久我縄手 56
湖水渡り 148, 150
小牧・長久手の戦い 17, 201, 215
小松城 209
惟任光秀の乱 2, 14, 35, 136, 155, 172,
176, 190, 213-216

【さ】

境野一号墳 132
坂原阿上三所神社 79
坂本城 47, 130, 136, 141, 142, 146-148,
150, 153-155
桜峠 190, 191
——越え 190
篠山城(笹山) 41, 43, 44, 47
真田丸 208
狭間くぐり 118-121
さらさら越え 3, 200-204
ザラザラ越え 200, 203, 204
ザラ峠 201, 202
山陰道 51, 52, 55
三職推任 45

【し】

信楽越え(シカラキ越) 187, 189, 190,
192, 193, 195
自焼没落 181
賤ヶ岳の戦い 117, 215
下鳥羽 57, 130, 131
儒教道德 120, 138, 157, 164
勝龍寺城 130, 131, 135
神君伊賀越え → 伊賀越え
新座家老 139-141, 216
新書太閤記 75

【す】

瑞龍寺 183, 184
末森合戦 142
数寄屋 41, 43, 47, 49, 144

【せ】

誓詞血判状 49, 144
関ヶ原合戦 21
瀬田橋 147, 148

【そ】

総見院 152
総見寺 90
尊経閣文庫 28, 34, 36, 37

【た】

太閤記(大河ドラマ) 75
大徳寺 151, 152, 186, 188, 190, 215
高岡宝円寺 183
高松城(備中, 高松) 40, 42, 45, 129
高見峠 194, 197, 198
武田勝頼攻め 84
竹内峠 194, 195, 197, 198
太政官修史館 27, 30, 34
立山連峰(越え) 200-204

索引

多羅尾一党 188, 189, 193, 194

【ち】

千国街道 201

中国大返し 129

中国毛利攻め (中国出陣, 中国攻め)
44, 45, 52, 58, 89, 90

朝鮮出兵 70

【つ】

津田遠江長光 (太刀) 137

【て】

天地人 208

天王山 126, 132-134

【と】

道明寺 41, 43, 144

独眼竜政宗 208

得長寿院 135

鳥羽 42, 44, 55-57, 94-96, 100, 104,
106, 109, 110

——街道 56

——南殿 130

富山城 203

鳥越の戦い 116

【な】

中尾峠 202

長久手の戦い → 小牧・長久手の戦い

長崎称念寺 156

中島文庫 204

なんてん寺 57, 130

【に】

二条御所 (二条) 3, 95, 96, 98-101,
106-115, 117, 119, 121, 122, 126, 127,
130, 142, 155, 183, 192, 214

二条城 58, 107, 117, 152

二条殿 95, 118

人形浄瑠璃 150

【は】

廃藩置県 14, 28

廃仏毀釈 157

八王子 (寺) 城 115, 116, 160

針ノ木峠 201, 202

【ひ】

日野城 180

【ふ】

福知山城 87, 143

不動国行 145, 146, 150-153

武辺咄 31, 32

【ほ】

本能寺 1-3, 42, 44, 50-60, 62-70, 73,
75, 77-79, 94-98, 100, 109-113, 124,
126, 130, 136, 143, 147, 148, 155,
158, 159, 161-163, 176, 178, 183, 214
——の変 1, 2, 20, 31, 48, 57, 67, 88,
91, 143, 160, 180, 213, 214

【ま】

前田家編輯方 28, 30

【み】

三井寺 148, 151, 153

三草越え 51

光秀供養墓 138, 156, 157

光秀塚 156, 157

光秀墓 137, 156

妙覚寺 56, 94-100, 111, 112, 121, 155

三好三人衆 137

【む】

武者絵 75, 162

【め】

明暦の大火 21, 152

【も】

森田文庫 32

【や】

山鹿流兵学 15

——者 91, 192

山崎の戦い 1, 3, 57, 69, 70, 107, 108,
127, 129, 131-138, 146, 147, 151, 183,
213, 215

大和越え 196, 197

山本山城 154

【ゆ】

宥照寺 156, 157

【よ】

夜討ち朝駆け 50, 52, 53, 66

読み本 58, 74, 75, 150, 162, 201

【わ】

渡り奉公人 66, 117, 137, 141

【を】

ヲンボウガ塚 → 御坊塚

【著者】

萩原 大輔 (はぎはら だいすけ)

1982年生まれ。富山市郷土博物館主査学芸員。

〔主な著作〕

『武者の覚え 戦国越中の覇者・佐々成政』(北日本新聞社、2016年)

『謙信襲来 越中・能登・加賀の戦国』(能登印刷出版部、2020年)

いぶん ほんのうじ へん いたや の かきもの する みつひで らん
異聞 本能寺の変—『乙夜之書物』が記す光秀の乱—

[史料で読む戦国史 4]

2022年3月22日 初版第一刷発行

定価 (本体 2,800円 + 税)

著者 萩原大輔

発行所 株式会社 八木書店出版部
代表 八木乾二

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-8
電話 03-3291-2969(編集) -6300(FAX)

発売元 株式会社 八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-8
電話 03-3291-2961(営業) -6300(FAX)

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/>

E-mail pub@books-yagi.co.jp

印刷 上毛印刷

製本 牧製本印刷

用紙 中性紙使用

ISBN978-4-8406-2246-2

©2022 HAGIHARA DAISUKE